

った圃場もあった。

本種に対する薬剤防除は、防除開始時期を逸しないこと、効果の高い薬剤を使用すること、防除間隔が開かないようにすることが重要である。ねぎでは圃場外からの飛び込みが多くなる7月下旬から8月下旬頃は、7日間隔で効果の高い薬剤を使用する。結球部被害が問題となる8～9月どりのキャベツでは、定植前に効果の高い薬剤を灌注し、定植3週間からは効果の高い薬剤で収穫期まで防除を実施する必要がある。

(4) うり科野菜の土壌伝染性病害

令和2年、道内ではじめてホモプシス根腐病の発生がメロンおよびきゅうりで確認された。また、メロン黒点根腐病の発生地域が拡大していることが明らかとなった。両病害ともに着果負担がかかる頃や収穫が本格化する頃になると急激に株全体が萎れることが特徴で、灌水不足や生理障害などと誤解され、被害が拡大している場合がある。発生を拡大させないためには早期に発見することが重要である。両病害とも毛細根に特徴的な症状を示すので、栽培終了後に毛細根が脱落しないように根を丁寧に掘りとり、発生の有無を確認することが必要である。

(5) りんごの腐らん病

腐らん病は、りんごの最重要病害で、胴枯れ、枝枯れ症状を引き起こす。発病部位を物理的に取り除き、園外で処分することと、樹勢を維持して病気に罹りづらい樹を育てることが重要である。

4. 令和2年に新たに発生を認めた病害虫

令和2年に道内で新たに発生を認めた病害虫は24（病害13、害虫11）であった。その一部を抜粋して紹介する。

(1) 小麦のタテスジケンモン（新寄主）

秋まき小麦圃場で葉を縁から食害していた。令和元年以前は道東の飼料用イネ科草地で局所的な被害事例が散見されていたが、令和2年は十勝地方のチモシー草地でも広範囲に発生が確認された。



小麦を食害するタテスジケンモン
(三宅原図)

(2) キャベツのヒメダイコンバエ（新寄主）

結球下部を筋状に食害する。食害は結球内部まで及び、その付近の葉が腐敗する。本種の発生は、これまで冷涼な地域に限られていたが、近年、分布域を拡大している可能性がある。



ヒメダイコンバエによる食害跡
(佐々木原図)

【補足】

「特に注意を要する病害虫」および「新発生病害虫」の詳細な情報については、北海道病害虫防除所のホームページに掲載しているで、そちらもご覧いただきたい。

詳しい内容については、次にお問い合わせください。
道総研十勝農業試験場 生産技術グループ
電話 (0155) 62-2431 E-mail : tokachi-agri@hro.or.jp